

作文集 卒業生編

忘れたくない島実の思い出 園田泰成 2022年度卒業生

小学校の時は家族がすべてだった。両親の教育は完全なものだと思っていた。私の姉二人が、中学受験に成功し、県内で名の通った高校に進学していたからだ。そのような家族の中で育った私の生き方は、もう決まっていた。小学校四年生になると塾に入り、五年生で中学受験クラスに入った。しかし、私はついていけなかった。それでも行くしかなかった。塾のある土曜日は、泣きながら車で塾に向かった。帰ってくると私の学力のことで両親は喧嘩をしていた。私は一人自室で勉強していた。ある日小学校から家に帰ると、母は泣き崩れ、父は呆れた顔で私を眺めた。何の話も聞かずに自分の部屋に戻った。私は中学受験に失敗した。そこから家族はどんどん崩れていった。中学校では何とも言えない居辛さを感じ、毎日三階から下のコンクリートを眺めていた。当時の担任がそれに気づき、一週間の自宅待機が決まった。それを機に学校にだんだん行かなくなった。正直何が何だかわからなかった。雨戸は締め切り、部屋の電気はつけず、ドアの窓にはガムテープを張った。学校からも家族の関係からも逃げた私の居場所は、インターネットの世界になった。だが、ネットでもいじめがあった。そのくらいからだんだん死ぬことを考えていった。どうやって死のうか毎日考えた。私は不登校の生活をだらだらと続けた。

中学三年生になり、受験の話が舞い込んできた。私は、死ぬ一歩が踏み込めないと絶望していた。受験の話が怖かった。どうせ毎日通えないからと、通信を考えていた。島実と出会ったのは、不登校向けの合同説明会だった。正直諦めていた。何も期待していなかった。島実の番が来た。私と父は聞きながら涙をこぼした。言葉では言い表せないものが心にずしんと来た感覚だった。自遊祭に行こうと心に決めた。自遊祭は、何とも言えないあたたかな空気だった。私の心に少しだけひかりが灯った。一緒に行っていた母に「ここに来る気がする」と勇気を出して伝えたのを私は鮮明に覚えている。

ここに入学さえすれば、幸せな人生を歩めるかもしれないと思い、入学した。入学したての頃は苦労の連続だった。コロナウイルスの影響で入学式が延期、縮小、ほとんど顔の見ることのできない生活。友達ができないかもしれない不安にも襲われた。教室、学校、人が怖かった。一年の時は出席が安定しなかった。二年の時は余裕がなかった。ずっと自己嫌悪し何もかも投げ捨てたかった。全て諦めたかった。先生方とたくさん面談をした。先生方は親身になって私の話を聞いてくれた。何かせかすようなこともせず、家から出られないときでもずっと待っていてくれた。友人とぶつかったときも見守っていてくれた。どんなことがあっても受け入れてまた新しい一歩を踏み出せるように私を取り巻く環境を整えてくれていた。自遊祭では先輩方の話を聞く機会があった。私と同じような不登校を経験している人が多くいた。それでも、日常生活を送り、力強く自遊祭を行う、そんな姿にあこがれた。自分がどれだけ狭い世界で生きていたのかを知った。その後、クリスマス会があった。島実の今までの歴史に触れ、思いに触れ、ひかりに触れていった。それは、中学生の時に自遊祭で感じたひかりそのものだった。だんだんと落ち着きを取り戻していった。歴史の中で私までつながってきたひかり、そんな尊いつながりを絶対に絶やさないと強く心に決めた。

でも、しばらくして、再び体が思うようには動かなくなった。一月、限界がきて、命を投げだそうとした。記憶があいまいだが、気付くと入院していた。隔離の生活はきつかった。面会ができず、背伸びをして曇りガラスの上から外にいる家族に手を振ることが唯一の楽しみだった。家族が恋しかった。医者に相談し、予定より早く退院できた。ただ、学校が始まっても出席は安定し

なかった。そんな時、角田先生と藤平先生が私の家に来てくださった。余裕がなく何も見えない私にも見えるほど、愛情を感じた。たわいもない話しかしなかったが、正直あれがなかったら、私はこの世界からいなくなっていたと思う。今思えばわかる。私は多くの人に愛されていたのだ。島実が生徒一人ひとり愛していること、先輩たちが私たちに愛情をもって接してくれていたこと、そして親が誰よりも私を愛してくれていることにやっと気づけた。「あなたはあなたであればいい」その言葉がずっと心の奥底に入ってきた。それは、私の中で止まっていた心の歯車を力強く回し始めた。そこから私はできる限りのことをすべてやった。自遊祭では、実行委員長を務め、私の持てる愛情をすべて注ぎ込んだ。当日は雨予報だったが、結果なんて私にとっては飾りに思えた。一か月、十分すぎるほど私たちは頑張ってきた。みんなが一步を重ね成長した。当日がどうであれ、その事実は絶対に変わらないと強く思った。「雨が降ってもいいじゃないか、大切なことはほかにある」その日私が実行委員の報告会で言ったことだ。当日、演出の直前で雨が降り、全員で椅子を片付け、ステージにテントを上げた。雨が降る中の演出は、入学時から様々な困難に見舞われた私たちにとって、誇らしいものだった。あのステージからの景色は忘れたくない。

私は恵まれている。心から愛してくれる家族がいる。心から愛してくれる島実がある。私を心から愛してくれる人が周りにはたくさんいる。私はそんな人たちを愛している。できるだけ多くの人に幸せな人生を送ってほしい。だから忘れないでほしい。私は、島実は、きっとこの文章を読んでいるあなたが、心から幸せな人生を送ることを願っていることを。あなたが生きていてくれるから私たちが毎日頑張れて生きていけることを。

私は静岡福祉大学に進学し、夢に向かって歩みを進めている。忙しくて、勉強はちょっと難しいけど、何とか頑張っている。今たまらなく楽しい人生を送っている。父と母は、私が大学に通っていることを心から喜んでくれている。そんな笑顔で彩られる毎日を大切にこれからの人生を歩んでいこう。

忘れたくない島実の思い出 園田泰成 母 園田久美子さん 2022年度卒業生保護者

一月に孫が生まれた。孫が私の人差し指をぎゅっと握ってきた。小さいけれども力強さを感じた。おじさんになった泰成も、にこにこ笑っている。泰成は、もっと小さかったんだからー。こんなに大きくなって、という泰成がいたずらっぽい顔をして、お母さん小さいねーという。たわいもない会話だったが、ほっとしたひと時だった。

泰成の手のひらを最後に握ったのはいつだろうか。私が泰成の手を握るという行為は、泰成の安否確認であった。泰成は、中二の五月から不登校になった。朝昼晩、泰成の頭を触り、手を握り、温かいと「生きている」と安心した。毎日恐る恐る触ったものだった。俺なんかがいても仕方ない、どうやって死のうか考えている。死ぬから学校に行っても意味がない。自分の子どもが不登校になり、死にたいと言う。なぜだ。涙が止まらず、生きていれば必ずいいことはある。こんなありきたりな言葉では、泰成には通用しなかった。真正面に向き合うこともできなかった。どうしたらよいかわからなかった。中三になり、進路の話をした。始めは行く気がなかった様子だったが、自遊祭の先輩や先生方の姿を見て島実に決めた。島実生活は、私には楽しそうに見えた。しかし友達ともめたり、行事で悩んだり、学校を休むこともあった。島実もいけなくなったらどうしようと、不安になることもあった。私が悪いのかと自分を責めたこともあった。思い切って、泰成がこんなに苦しくてつらい思いをさせている原因は、お母さんだよと聞いた。泰成は、「違うよ。でも、願いがある。お母さんが苦しんでいるのは僕のせいなんだけど、でも、お母さんにはいつも笑っていてほしい。」と言った。確かに、誰かと比較してはへこみ、愚痴って

へこみ、ため息をつき、暗い自分にまたへこみ、泣いてばかりの毎日だった。分かった、ごめんね。といったもののそう簡単に笑えなかった。泰成が自遊祭の実行委員長を務めた。泰成が少し変わった。自遊祭を成功させるために一生懸命だった。今までの先輩たちの苦勞が分かった。先生方の情熱を感じたと、だからみんなで頑張るんだと。島実は、いろんな思いを持った子が来る。不安な気持ちを抱え入学時に門をくぐった子が何人いただろう。泰成も私もその一人である。「無理しなくていい。泥水に入って考えたいのなら、僕らもずっと一緒に泥水に入る。出たいというまでずっと入っている。島実は、その泥水から出る一歩目を進むことができるまで、とことん付き合う場所でもある。太陽の光を浴びることがすべてではない。明るい場所に行く勇気がなければ、いけるまで一緒に待つよ。だから安心してほしい。」と角田先生が話してくれたそうだ。家を出る、誰かと話す、何気ない一歩だけど、泰成にとってその一歩が難しかった。そんな一歩を二歩にも三歩にも伸ばしてくれた。卒業式、晴れやかな堂々とした姿に感動した。夢のようだった。帰り、空を見上げた。こんな風に空を清々しい気持ちで見上げたのは何年ぶりだろう。空を見上げるってこんなに気持ちがいいものだったのかと。

ギターに夢中の泰成の手は、私より大きくて、指先は少し硬く、ごつごつだ。泰成の手は、ごつごつで大きいねというと、いたずらっぽい顔で、お母さんの手はカッサカサだねー。クリーム塗りなーと言ってきた。保育士を目指す泰成は今、そのごつごつとした手でピアノと格闘中である。